

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究 C
 研究期間：2006 年～2009 年
 課題番号：18520115
 研究課題名（和文） 日仏共同による日本の現代・古典文化の学際的研究
 研究課題名（英文） Interdisciplinary study of modern and classic culture of Japan
 by Japan-France cooperation
 研究代表者 柴田勝二
 東京外国語大学・外国語学部・教授
 研究者番号 80206135

研究成果の概要：2006 年度より 2008 年度の三年間にわたって日仏の間で連携を取りつつ、それぞれの国における受容と研究の現況を確認しつつ、現代と古典の日本文化・文学を研究した。成果としては 2008 年 11 月 8 日に「内と外から見る日本文学」というシンポジウムを催し、両国から計 8 名の研究者が報告をおこない、充実した討議が交わされた。また 2009 年 3 月にはこのシンポジウムの報告と、発表者による論文を集めた報告集が作成され、最終的な成果とした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	570,000	3,270,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：日本文化・比較文化・文化享受

1. 研究開始当初の背景

①村上春樹の小説や宮崎駿のアニメーションが世界的な規模での読者・観客を集め、その価値が高く評価されるなど、日本の文化・文学への関心が世界的に高まってきている。またこうした現代文化だけでなく、『源氏物語』の翻訳・研究が各国で進められるといった、古典文化への関心・評価もグローバルな形で高まってきている。

しかしそれらが世界文化の一つとしてどのように位置づけられ、どのような意味を持つのかという研究は十分になされていない。また現代文化と古典文化の間には大きな隔りがあるように見え、日本文化としての一貫性がどこに見出されるかという探求も十分におこなわれるというとはいえない。

こうした状況に鑑み、世界文化として日本の古典文学・現代文学、及び両者の連関

を捉え直す必要性が高まってきていると判断された。

②本学は多くの海外提携校と連携をもち、学生や研究者の交換をしつつ、研究・教育をすすめているが、フランスにおける日本研究の中心的機関であるパリの国立東洋言語文化大学(イナルコ)はその一つであり、以前から本学と親密な関係を保っている。イナルコの研究者と共同で日本の現代・古典文化を研究することは、多角的な眼差しで日本文化を捉えようとする本研究のねらいを実現するためにひじょうに有利な条件となると思われた。

2. 研究の目的

研究の目的は大きくいって、二つあげられる。

① 日本の現代文化への関心、需要が海外において高まっているが、それはどのように受け取られ、理解されているのか。たとえば三島由紀夫や村上龍・村上春樹の文学は、フランスでどのように享受されているのか、といった問題を、ある程度具体的な地平で検討することを目指す。

文学作品にはかならず普遍性と個別性の両面が存在するが、三島や両村上の作品の背後にある時代・社会的文脈は、日本の読者や研究者には容易に理解され、それを前提として解釈ができるが、それをほとんど知らないフランスの読者にも彼らの作品は楽しまれ、評価されている。しかしそれによって見えなくなっている部分が存在するはずであり、一方日本とは異質な文脈に置かれることで、日本人の読み手には捉えられないものが海外の読み手には見えているということも考えられる。

そうした日本と海外における文学作品の享受における共通性と異質性を、フランス在住の研究者たちとの討議のなかで少しでも明らかにしていきたい。

② 日本の現代文化と古典文化との間には大きな落差が存在する。使われている言語に距離があり、またその背後にある社会システムや宗教・思想的文脈も大きく異なっている。『万葉集』や『源氏物語』はすでに日本の読者にとっても遠い世界となっており、たとえば本学の学生がそれらにどこまで通じているかということは疑わしい。

そうした状況を踏まえれば、古典文学に対する距離は現代における日本と海外の読者の間でさほど変わらず、ある意味では共通した問題点を見出すことができるとも考えられる。それは現代文学の把握における

問題との差異であろう。こうした距離の共通性を踏まえつつ、古典文学と現代文学の間にある落差とつながりは何かということ、日本とフランスの研究者の発表・討議によってあぶり出していきたい。

上記のような目的をもって、内外における日本文化・文学の受容・研究の現況を確認しながら、それらを多角的な視野から捉え直し、日本の現代文学および古典文学が現代人にとってどのような意味を持つかということをも明らかにすることを目指して、日仏の連携を取りつつ研究を開始した。

3. 研究の方法

本学の提携校であるフランスの国立東洋言語文化大学の研究者とメールなどで連絡を取り、一年に一度は本研究代表者がフランスに赴く形で交わりをもって、問題点を確認しつつ研究・調査を推し進め、シンポジウム開催に向けた準備を進めていく。

とくにグローバル化した現代社会に置かれた両国の時代・社会的文脈において、現代及び古典の文学作品あるいは文化表象がどのように理解・解釈されるのか、これまでになされた研究の堆積を洗い直し、またフランスにおける日本文学の翻訳の状況などにも目を配りつつその可能性を探っていこうとした。

4. 研究成果

2008年11月8日に本学アジア・アフリカ研究所にて「内と外から見る日本文学——古典と現代の出会いを求めて」と銘打たれたシンポジウムを開催した。発表者は日本からは研究代表者と研究分担者に加えて、本学大学院修了生である熊本大学の研究者を招き、フランスからはフランス国立東洋言語文化大学(イナルコ)から4名、及びボルドー大学から1名の研究者を招き、計8名であった。

シンポジウムは「文学作品を精読する」という午前の第一部と、「日本文学の時空」という午後の第二部に分かれ、以下の発表によって構成された。(敬称略)

第一部 (文学作品を精読する)

村尾誠一 (東京外国語大学教授、研究分担者)「古典の精読とは何かを考えるために——和歌の注釈は何を明らかにしようとしてきたか」

ミシェル ヴィエイヤール・バロン (フランス国立東洋言語文化大学教授)「古注釈を

読む——『顕注密勘』をめぐって」
アンヌ バヤール・坂井（フランス国立東洋言語文化大学教授）「フランスで日本現代文学を教える——村上龍の場合」
上田眞木子（フランス国立東洋言語文化大学准教授）「フランスで現代日本の詩を教える」
第二部（日本文学の時空）
寺田澄江（フランス国立東洋言語文化大学准教授）「生成する風景」
溝渕園子（熊本大学准教授）「紀行文学における風景——「五足の靴」は天草に何を見るか」
浅利 誠（ボルドー大学教授）「『豊饒の海』の作者と伝統——自然をめぐって」
柴田勝二（東京外国語大学教授、研究代表者）「中上健次の時空——村上春樹との比較のなかで」

第一部、第二部とも四人の発表には古典と近現代を対象とするものを混在させ、時間的な距離を折り重ねつつ、日本文学とその研究・教育の多様性を浮かび上がらせようとした。参加者は40名を越え、それぞれの発表の後に活発な討議が交わされたが、とくに焦点となったのは、日本文学に特有のスタイルや言葉遣いを、フランスの学生・読者にどのように理解させるのかということであった。

たとえば上田氏が扱った短詩形文学は、日本人にとっても必ずしも理解が容易ではないが、フランス人学生にとっては「行換え」による書き方自体が困難であり、反面抽象性の高い表現にはかなりついていけるといった反応を示されるといふ。また坂井氏が村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』の文章を説明するのに「鬼子母神」という用語を使ったところ、フロアよりそのような用語をフランスの学生が理解しうるのかという質問があったが、坂井氏によれば、こうした日本独特の用語は、近い含意をもつ西洋語の援用によって十分理解させうるといふことであった。

また浅利氏の発表においては、三島由紀夫の『豊饒の海』に入り込んでいるロートレアモンの文脈が指摘されたが、これは日本人の読者にはほとんど気づかれない、長年フランス文学に携わった研究者ならではの着眼であった。今回近現代文学のフランス人研究者は参加されなかったが、こうした着眼・発見が、海外の研究者によってなされる可能性が示唆されたといえよう。

一方古典文学の発表においては、作品の表現を後世の人間がいかに関心を持つかということが主題化されることが多かったが、興味深いのは、原作品との距離は日本人とフランス人の間でさほどないばかりか、た

たとえば平安時代と鎌倉・室町時代の間でも本質的には変わらないということであり、作品の他者性が近現代文学よりも強固な形で存在することが確かめられた。

このシンポジウムにおける発表を基として、各発表者に論文を書いてもらい、2009年3月に論文集を作成した。これによって三年間にわたる共同研究の最終的な成果とした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

柴田勝二「殺し、交わる相手——『海辺のカフカ』における過去」（『東京外国語大学論集』第76集、2008/7）

柴田勝二「〈終わりの後〉の世界——『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』とポストモダン批判」（『東京外国語大学論集』第77集、2008/12）

柴田勝二「重層する現代と古代——『枯木灘』の時空」（『東京外国語大学論集』第75集、2007/12）

柴田勝二「転移する暴力——『岬』への道程」（『絃説』Ⅲ—01、2007/8）

柴田勝二「受動的な冒険——『羊をめぐる冒険』と〈漱石〉の影」（『東京外国語大学論集』74号、2007/7）

柴田勝二「未来への希求——『こゝろ』と明治の終焉」（『東京外国語大学論集』72号、2006/7）

柴田勝二「表象される〈半島〉——『行人』と朝鮮統治」（『総合文化研究』9集、2006/3）

柴田勝二「自己を救うために——『それから』と日韓関係」（『絃説』Ⅱ—10、2006/1）

村尾誠一「後鳥羽院正治初度百首と勅撰和歌集への意志——『正治和宇奏状』の再検討を發端に」（『国語と国文学』2008/4）

村尾誠一「新勅撰和歌集のために——花実論とその周辺」（『東京外国語大学論集』第75集、2007/12）

〔学会発表〕（計 2 件）

村尾誠一「Waka in the Middle Age of Japan——Kenko and Shotetsu of the Court Age」（大学院G Pイタリア合同シンポジウム・セミナー、2008/11/18）

村尾誠一「新勅撰和歌集のために——花実論とその周辺」（東京大学中世文学研究会例会、2007/11/13）

〔図書〕(計 2 件)

柴田勝二『中上健次と村上春樹——〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』(東京外国語大学出版会、2009/3)

柴田勝二『漱石のなかの〈帝国〉——「国民作家」と近代日本』(翰林書房、2006/12)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴田勝二(東京外国語大学教授)

(2) 研究分担者

村尾誠一(東京外国語大学教授)

(3) 連携研究者

ミシェル ヴィエイヤール・バロン(フランス国立東洋言語文化大学教授)

アンヌ バヤール・坂井(フランス国立東洋言語文化大学教授)

上田眞木子(フランス国立東洋言語文化大学准教授)

寺田澄江(フランス国立東洋言語文化大学准教授)

浅利 誠(ボルドー大学教授)

溝渕園子(熊本大学准教授)